

冊	子	目	録
	落	穂	拾
			い

国立国会図書館所蔵朝鮮関係資料目録
 1. 日本文篇 補遺版 昭和58年3月現在 昭和59年2月発行 (1. 日本文篇 昭和41年刊の補遺版)

この目録には、古いものは明治時代、最も新しいものは1983年のはじめ頃に発行された図書が収録されている。その時々により目録、分類が異なっているので、当然ながら冊子目録用の原稿を統一する必要がある。もちろん、印刷ガードや『帝国図書館と漢国書書名目録』だけを見て、冊子目録用の原稿ができるわけではない。たとえば小さいことになるが図書の大きさをcmで統一することにしたので、大きさの記載されていないものがあれば、書庫にもものさしを持参し計らなければならない。刊行年は西暦で表記したので、明治、大正、昭和などは書き直し、著者標目にカードを修正するものも多数出てきた。ほとんどの印刷カードは訂正指示で赤くなった。分類についても同じことがいえる。今回は「国立国会図書館分類表」(NDLC)によったが、古い図書などは、NDLCのどこに入ればよいか、すぐにはわかりにくい。ずいぶんとながく考え、あれこれ迷った末、やっと分類ができたものもある。このような作業をしながら、目録規則、分類表などの改正・修正はあまりないほうがありがたいと思ったりした。

※

前回の1966年刊のものと比較すると、今回の特徴は在日韓国人・朝鮮人の著作が多くなっていることである。分類の政治、社会、労働、教育にもそれぞれ〈在日韓国人・朝鮮人〉の項目を作ったが、合わせるとこれらの資料は約150種となる。そして書き手の多くは、やはり在日韓国人・朝鮮人で、1970年代以降に刊行されたものが圧倒的である。文学についてもまったく同じことがいえる。文学・文学史から作品集まで含めると約250種になるが、多くは在日の人達の著作である。標題は「朝鮮関係資料目録」となっているが、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国に関するものだけではなく在日韓国人・朝鮮人についての資料も相当数占めている。これらの資料に接する時、在日韓国人・朝鮮人の問題は、まさに自分自身、日本人の問題であるという感じを強くした。

※

最後に、当館では昭和58年10月より、「朝鮮人名の読みについて」目録規則が一部修正された。そして母国語読みがかな表示によって記入されている時は、その読みで記載することになった。補遺版では時期的な関係もあり、従来どおりの漢字の日本語読みにならった。韓国人・朝鮮人の表記については、研究機関や図書館界の協議により十分に検討し、統一された表記法を作成する必要があると思っている。

(アジア・アフリカ課 大口里子)